『四枢要徳について――西洋の伝統に学ぶ――』　～目次～

徳とは何か？――ヨゼフ・ピーパーの「徳」論の理解のために（稲垣良典）

はじめに

第Ⅰ部　思慮
第１章　枢要徳のなかで第一のもの
　思慮は倫理徳を「産む」。これはただの寓意ではない　　その他
第２章　現実在を知ることと善の実現
　善を為すには現実にかんする知識が前提となる　　「原良心［良知］」と「状況良心」
　無ければならないことが欠けている無思慮、その根としての邪淫　　思慮ぶることと「貪欲」
　その他
第３章　境界の線引きと対照
　暗やみを起源とする人間の行為　　道徳主義と決疑論の過大評価
　道徳論を知っても「思慮ある」ことにはならない　　その他
第４章　思慮と愛
　思慮と倫理徳の相互依存関係　　思慮と愛との争い
　聖性は現実性のいっそう深いところを見せてくれる　　その他

第Ⅱ部　正義
第１章　権利［当然の持ち分］について
　正と不正の種類は多様である。しかし、「その人のものはその人へ」という考え方は一貫している
　人には当然の持ち分が帰されるが、それは何を根拠としているからなのか？
　この当然の持ち分の譲り渡しえないこと　　権利の譲り渡しえないことの究極の根拠である被造性
　その他
第２章　他者と負い目・責務　　70
　正しい人の相手方としての「他者」　　何か負い目・責務があり、その負い目・責務を果たすこと
　倫理的な行いはすべて「何者か」に対している　　外的な行為のあるところ、必ず正・不正が生じる
　「正しいことを行う」ということと「正しい人である」ということ、これらは別である　　その他
第３章　正義の優先順位
　正義の優位を示す議論　　倫理的な秩序のもっとも悪い堕落：不正義
　悪の世界支配は「修行」と「武勇・英雄」を排除しない。それは正義を排除する　　その他
第４章　正義の三つの基本的な形
　「いつ正義が支配していると言えるか」という問いへの賢人の答え
　三つの基本的な関係とそれぞれに応じた正義の三つの形
　個人主義と集団主義は共同生活の本当の姿をゆがめる
第５章　均等になるように調整することと「元どおりにすること」
　交換正義：人間共存の核心　　然るべき権利を与え返すことは「元どおりにすること」である
　その他
第６章　分配の正義
　分配的正義のしくみ：共通善の管理者は義務を負う者である
　対価を支払うことと分配することとの違い　　実質価値のほかに権利者の人格が顧慮される
　歪んだ二者択一：「全体主義的」か「民主主義的」か　　最高の共同体である国家

国家権力に相対したときの個人の権利の不可譲渡性
分配的正義の履行は強制される性質のものではない
：権力者をして不正を行わないように阻止するものは、当人の正義だけである
不正な支配ほど大きな災いはない　すぐれた政治の尊厳性
思慮と正義：支配者にとくに必要とされる徳　支配形態としての民主制の危うい点
共通善の正しい行政管理には個人の方からも同意すること　何が分配されるのか？
共通善の概念　不公平、別け隔て、という分配的正義の腐敗　その他
第７章　正義の限界
性質上返せない負い目　敬神（Religion）、孝養（Pietät）、敬順（observantia）
正しい者だけが自分の負い目ではないことを行う態勢にある　「あわれみのない正義は冷酷である」
その他

第Ⅲ部　勇気
第１章　序論
在るところのものを誤って解釈することは、在るべき姿［模範像］を歪曲することに通じる
思慮：屁理屈をこねる者の能力ではなく、真なる認識をただしく間違いない決断へと変換する術である
正義：これは契約上の利害を均等にする徳であるだけでなく、共同生活の目的実現に適合している
「節制」：その皮相化。そして倫理の問題の私人化　勇気：「険しい善」の徳　その他
第２章　死ぬ覚悟ができていること
傷つく恐れのあるところにだけ勇気がある　死への隠れたつながり
善は自ずと貫徹されるものではない　殉教者の教会は殉教を美化しない　その他
第３章　勇気はみずからを信頼してはならない
「危険に生きる」のではなく、善く生きる　思慮ある者だけが勇敢でありうる
諸徳のなかでの順位　「正義のない勇気は諸悪の原動力」　その他
第４章　持ちこたえと攻撃
勇気は怖いもの知らずと同じではない　倫理的な勇気と兵士の有能さ
究極的に恐れるべきものを恐れることが前提となる
忍耐：究極的な無傷の最高の状態　勇気と怒りは協同する　その他
第５章　三つの勇気（生命的、倫理的、神秘的）
生命的、倫理的、神秘的という三つの秩序　病的な保身欲
勇気における完全性の段階　「暗やみの夜」　霊的贈物としての勇気
根本は神への人間の献身　希望をもつ者の試しとしての勇気の現場　その他

第Ⅳ部　節制
第１章　言葉の問題
ソープロシュネーとテンペランティアのすぐれた意味
提案：「節制・締まり（*Zucht*）」と「節度（*Maß*）」　その他
第２章　無私無欲の自己保全
節制とは：自分のなかの秩序を自分で達成すること　おのれ自身へ立ちかえる二つの仕方
自分本位の自己保全が破壊的であること　無私無欲の自己保全としての節制
節制とふしだらの基本的な諸形　その他
第３章　貞潔と邪淫
貞潔と邪淫についての聖トマスの理論でほっとすること
「理性の秩序」とは：観念論、合理主義、啓蒙主義、精神主義のものは「理性の秩序」ではない
ふしだら（*intemperantia*）と無抑制（*incontinentia*）との違い　決疑論的な判定の難しさ

感性的な美を悦ぶには貞潔が必要である
貞潔を高く評価するときの誤った前提：常に危険なもの、マニ教
「世の中」という名の腐敗した世界　諸徳のなかでの順位　その他
第４章　純潔
貞潔と純潔　おとめの奉献と結婚の肯定　純潔にたいする二つの異論　その他
第５章　断食
断食と晴れやかな心　自然法的な断食の義務づけ　無私無欲の証印　その他
第６章　触覚
倫理的な人間の生命的な水源　痛みを支配するものとしての節制　その他
第７章　謙遜
節制の基本的な形、謙遜　高邁：必然的に節制に属してくる徳　謙遜とユーモア
おのれの被造性を認めること　その他
第８章　怒りの力
怒りの力をほめる　柔和は怒ることができないことではない
怒りの抑制のなさと欲情の抑制のなさ　その他
第９章　目の欲にたいする節制
どこまでも知りたがる無節度　「目の欲」による自己破壊
自己保全のために、見ることを躾ける　その他
第１０章　節制の結ぶ実
節制と美　節制は清める　清さ、心を開いて受け入れること　その他

出典注
解説
人名索引・事項索引